

南三陸町長と白石市長の新春対談

白石市の風間市長と南三陸町の佐藤町長の新春対談を、本紙と「広報しろいし」の同時掲載でお届けします。

風間市長と佐藤町長は、3年前の東京での要望活動で知り合い、親交を深めていくうちに、互いのまちの交流人口を増やせないと考える、昨年、互いの職員同士の交流を行い、観光やまちづくりについて情報交換を行いました。

この対談は、「広報しろいし」の企画として風間市長からの要望で佐藤町長への対談の申し出があり、本町を会場に行いました。対談では、これからの交流やお互いのまちづくりへの協力などについて話しが出され、これをきっかけに、官民を含めさらに発展した交流事業への発展が期待されます。



プロフィール
昭和35年（1960年）12月23日、白石市生まれ、47歳。
立正大学佛教学部卒業。平成16年11月まで幼稚園副園長。
平成10年1月から白石青年会議所理事長、平成11年1月
から日本青年会議所東北地区宮城ブロック協議会副会長
をそれぞれ1年間務め、平成16年11月から白石市長。

白石市長
かざま 風間 康静 さん

南三陸町長
さとう 佐藤 仁 さん

■今までの交流

佐藤：ようこそ南三陸町においでくださいました。

風間：今日は大変お忙しい中ありがとうございます。南三陸町の町長さんとは、ちよつとした縁があつて、白石にはない海をお持ちの佐藤町長と対談させていただきま

す。

佐藤：私も昔スキーなどで、蔵王にもたびたびお邪魔していたんですが、スキー場や温泉があるのが大変うらやましいなと思つています。白石には、うちの町にないものを持つていて、白石市との交流はお互いにならぬのを補完し合

せなのかなと思うんですが。

風間：そうですね。お互いがないものを分かち合えますからね。南三陸町まではちよつど2時間で、小旅行としては最高です。

そして、何よりこちらの魅力は、「体験型の南三陸時間旅行」というものをつくつて

いることです。

白石の市民が100種類以上の体験型観光をしながら宿泊したり、日帰りの海水浴をしたりと、夏は大いにこちらで遊び、おいしいものを食べられればと思います。お互いにあるものを、お金をかけずになんとか自然のままの交流ができないかと思つています。今年はお互いの住民の皆さんが「海彦山彦の体験型交流プラン」でもできないかなと考

えています。

佐藤：南三陸時間旅行ということで、知恵を絞りながらつくりました。昨年7月に白石にお伺いしたとき、三陸自動車道が津山インターまで供

白石市

白石市は県南部、西は奥羽山脈、東は阿武隈山系に囲まれた盆地に位置し、仙台と関東を結ぶ交通機関を活かした商工業が盛んです。蔵王山麓に位置し、自然や温泉に恵まれています。また、市街地には城下町としてのたたずまいが残されています。

開始されており、実質2時間かからなかったことに驚きました。そういうことでは、とても近い市だなという感覚があります。ところで、白石城（7ページ※1）を博物館にしなかったことは素晴らしいなと思つました。それから、白石城から下っていくとお堀があつて、その周りを散策すると緑もきれいで、武家屋敷などの昔の町並みの雰囲気もあつて、お堀をゆっくりのんびり歩いていると、白石の歴史と文化に心を癒される、そういうまちだと感じました。それから、私は商売が印刷



▲南三陸町役場の町長室での対談



白石和紙による加工品

業なものですから、紙というものにこだわりがありまして、前に白石市の女性の職員から手すきの和紙の名刺をいただきました。名刺交換というのはこれからどう話をしようかという入り口の部分ですから、私も海藻名刺を持っています。白石の和紙で作った名刺というのは良いですね。ということと話に入つていきやすいなと思つました。白石和紙（※2）は全国的に有名ですから、利用の仕方はこれからいろいろと考えられるのかなと思つています。

風間：そうですね。白石には「白石三白」と言つて、三つの白いものがあります。一つは白石和紙、白石温麺（※3）、



白石温麺

そして今はくず粉なんです。それぞれで頑張つていますが、今あるものをどう生かすかということがある課題だと思つています。

佐藤：そうですね。ないものねだりというか、どちらかというと私たち行政は、今あるものをどう細工するか考えなければならぬですが、どうしてもないものねだりをしてしまつています。自分たちが持つ

ているお互いの地域資源はいっぱいあるんですから、耕して良いもの見つけて、それを磨いていくことがとても大事なか

かなと思つています。

風間：町長が言うように、あるものを利用することのほかに、私は市民にそれぞれ好き

な場所を見つけてほしいと思

うんです。つい、東京や仙台と比べて「何もなし」と言つてしまいがちです。しかし、ないものねだりをするのではなく、自分のまちの良いところをピアーアルしていくことが大切だと思つています。

南三陸町は、海や山の素晴らしい財産がありますね。以前、ツツジがたくさん植えられた田東山に登りましたが、ツツジも素晴らしいのですが、そこから見るリアス式海岸の素晴らしさはすごいですね。学校の教科書で学ぶより、田東山から見れば一目瞭然

■まちのセールスポイント

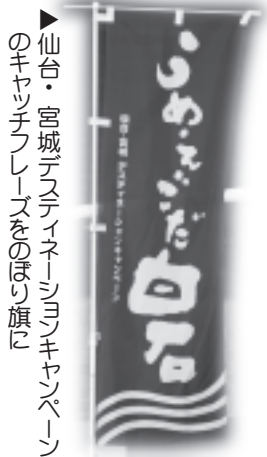
佐藤：確かに普段生活していると、自分たちのまちの良さというものが分からないですね。私たちのまちでは、「ブランド塾」を立ち上げて、12人の塾生が自分たちのまちの良さをあらためて再発見し、観光地としてのブランド化と特産品のブランド化をやつて

みようとしています。

それともう一つ、ブランド塾とくまくタイアップできたのが、仙台・宮城デスティネーションキャンペーンです。このDCの話が出た時に、ちよつどブランド塾をやつていたことが非常にプラスになりました。たとえば、キャッチフレーズの「汐風を食べてみませんか」はブランド塾で考えたんです。「汐風」の「汐」の一字も、「潮」にしようか「汐」にしようか悩んだのですが、やはりこの「しおかぜ」は「汐」の方がピタリだなと決めました。ロケーションもそうですが、地場の食材も含めてのキャッチフレーズになったと思つています。南三陸町ではこれで今どんどん売

出しています。

風間：うちのキャッチフレーズが「うめえごだ白石」なんです。「うめえごだ」の中には、「食べておいしい」、「上手である」、「素晴らしい技術」という意味があります。そして、若手の実行



▶仙台・宮城デスティネーションキャンペーンのキャッチフレーズをのぼり旗に

委員会が中心となつて実施しています。また、うちは今「賑わいづくり研究会」というのを、若手の皆さんで作つてもらつて、前に出した「仇討ちシリーズ」を考え出した